文書館収蔵の拓本資料
―林家の板碑拓本の紹介―

諸岡　勝

はじめに　拓本資料の概要

当館が所蔵する古文書は、五八万点あまりにのぼり、埼玉県の歴史を研究する上で貴重な史料群を形成している。こうした膨大な文書は様々なかたちで利用に供されているが、このなかには、数は少ないものの拓本資料が散見できる。

拓本資料が多く所蔵されている家は、①井上家（坂戸市・目録28集）二三点、②小室家（ときがわ町・目録36集）二三点、③小林（茂）家（大利根町・目録37集）二六点、④林家（坂戸市・目録22集）七四点など、二〇〇点あまりにのぼる。その多くは、各家々の先祖の墓碑銘や由緒を記した石碑であるが、井上家、小室家、林家には、国文学者である井上淑蔭や郷土史研究の先覚者である小室元長、林織善（おりよし）などの人物が当主となっており、自身が採集したり、寄贈を受けた瓦、梵鐘、板碑の拓本資料が所蔵されている。これらのなかには既に失われてしまったり、現存していても採拓することが困難な文化財が多く含まれている。

本稿では、様々な拓本のうち、筆者が研究の対象としている板碑の拓本資料について紹介することにしたい。

一　林家所蔵の拓本

板碑拓本を所蔵する林家は、入間郡赤尾村（坂戸市赤尾）の名主をつとめた家で、国学と和歌の世界に大きな足跡を残した江戸時代後期の国学者であり、井上淑蔭とも親交の深い林信海をはじめ、大正から昭和にかけて郷土史研究に情熱をそそいだ織善（勝呂村長、坂戸町初代助役をつとめた。一八九六～一九五八）が当主であった。とくに織善は昭和三年（一九二八）に埼玉県史編纂（旧埼玉県史）がはじまると、柴田常恵、稲村坦元等とともに編纂にたずさわり、埼玉郷土会の幹事もつとめ、『埼玉史談』などに数多くの論文や史料採訪の成果を発表している。こうした調査の過程で収集した資料が林家（七四点）に残り、今日に伝えられているのである。

本稿では、林家の板碑拓本二二点のほか、大柴家（さいたま市）三点、杉浦家（松伏町・目録21集）一点の二六点について、図版（11・26を除き、約1／5に縮尺）を掲載し、その概要と来歴などについて記述する。

二　板碑資料

1　阿弥陀三尊種子板碑片（林家一〇二一二）

阿弥陀三尊種子を本尊とする上部片である。阿弥陀種子・キリークのまわりを月輪状に光明真言を廻らしている。観音菩薩種子・サの一部を残し、中央に「性慶□」とある。拓本の註記に「川越市立図書館蔵」（現在は川越市立博物館蔵）とある。この板碑は、『埼玉県板石塔婆調査報告書』（19―131―165・以下『県報告』と記載。）『川越市史第二巻中世編　別巻板碑』（以下、『川越市史』と記載。四九四頁）に掲載されている。

厚紙の台紙に1～3の拓本が貼付された状態で保存。朱書きで「板碑断片三　川越市立図書館蔵」とある。

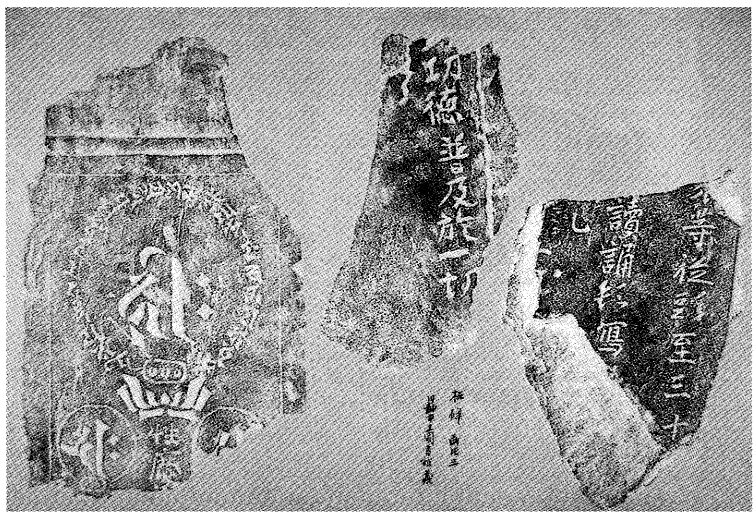
2　板碑片（林家一〇二一二）

「功徳普及於一切」とある断片である。「願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成仏道」（願わくばこの功徳をもって、普く一切に及ぼし、我らと衆生と、皆共に仏道を成ぜん）の一部である。法華経（化城喩品）を出典とするが、回向文としてよく使用される偈である。

『川越市史』『県報告』には未掲載の板碑である。

3　板碑片（林家一〇二一二・一〇二五八）

願文の一部とみられる断片である。「衆等従頭至三十」「読誦頓写」とあり、紀年銘にあたる部分に干支である「乙」と月数を示す「十」が残存する。この板碑片は古くから知られており、大正八年（一九一九）に山中笑が「武蔵野の板碑について」（『武蔵野』二巻一号）で紹介し、服部清五郎（清道）が「頓写経板碑に就いて」（『考古学雑誌』第一九巻第七号）と題して、この板碑の銘文に着目した論文を発表している。



『川越市史』（四九五頁）『県報告』（19―131―132）に掲載。

4　板碑片（林家一〇二五八）

これも3と同様、願文の一部とみられる破片である。「起石廟所」、「上佛果菩提」とある。書体や割れ方からみて本来、同一のものと考えられる。服部清道『板碑概説』第二章、「板碑の名称に就いて」のなかで「起石廟所云々」（二七頁）とあるのが、この板碑に該当する。（縣敏夫『服部清道と『板碑概説』ある板碑研究者の歩み』「Ⅳ『板碑概説』地方別索引」による。）『川越市史』（四五一頁）『県報告』（19—131—3）に掲載されている。

割れ方、書体等から3と同一個体と考えられる。

5　正長三年（一四三〇）**銘阿弥陀一尊種子板碑片**（林家一〇二一四）

阿弥陀種子・キリークを本尊とする上部片である。中央に「正長三□」とある。6とともに厚紙の台紙に貼付されている。朱書きで「板碑断片弐　川越市立図書館蔵」の註記がある。『県報告』『川越市史』に未記載。

6　結衆板碑片（林家一〇二一二・一〇二一四）

蓮座部分を残す下部片である。「法印承鎮　慶訓」、「妙昌尼　性幸尼　道本門　六郎四郎」など、道俗七二名あまりが刻まれている。板碑の法名は、十四世紀以降、禅門・禅尼号が多いなか、ここでは、「禅」は入れない結衆名である。上部右に「法印承鎮」とあるように、この板碑の造立にあたって主体をなした人々を最上段に記し、次いで女性の「尼」号が配され、以下、男女不同で下部に俗名と法名を刻む。『県報告』『川越市史』に未掲載。

7　正安四年（一三〇二）**銘阿弥陀一尊種子板碑**（林家一〇二四九）

上部に天蓋、蓮座上に阿弥陀種子・キリーク、下部中央に「正安四年八月日」の紀年銘と左右に鶴首型の花瓶を伴う板碑である。「弥陀　正安四年八月日　大里郡花園村小前田」の墨書の註記がある。この拓本では基部の部分が省略されているが、『県報告』（66—14—1）及び『花園村の今昔』（三四頁）には、板碑全体の拓影図が掲載されている。

8　正平七年（一三五二）**銘阿弥陀一尊種子板碑**（林家一〇二五〇）

蓮座を伴う阿弥陀種子・キリークを本尊とし、「正平七年正月十八日」の紀年銘がある。北朝年号の観応三年にあたる南朝年号であるが、足利尊氏が弟である直義を討つため南朝と和睦し、元号を北朝の観応から南朝の正平に切り替えた時期（正平六年［観応二年］十一月九日～正平七年［観応三年］三月十一日）の板碑である。裏面に「入間郡勝呂村大智寺」の註記がある。勝呂村大智寺は現在の坂戸市大字石井にある真言宗寺院。この板碑は、中島利一郎「板碑年表」『考古学講座第三十三』一九三〇、以下、「板碑年表」と記載）に「正平七年三月十八日　勝呂　石井　大智寺　安部立郎氏報」とあり、「正月」を「三月」としているのがこの板碑と考えられる。

安部立郎（一八八六～一九二四）は川越で図書館建設運動を推進し、大正元年（一九一一）に『入間郡誌』を著している。また郷土史研究を通じて林織善とも親交を結び、鳥居龍蔵らと武蔵野会を組織した。「板碑年表」に掲載された入間地域の板碑の殆どを中島利一郎に提供

している。「板碑年表」には大智寺所在として、この拓本を含め一二基掲載されているが、「年表」とあるように簡単な記載のため、現存する板碑と年月日が一致し同定と見なされるものは三基程度である。

また、『坂戸市史　中世史料編Ⅱ』（以下、『坂戸市史』と記載）に「文献及び調査資料に残る坂戸市の板碑」（三〇七頁）に次ぎのように掲載されている。

「　　台　　六一　一七　一八
キリーク　正平七年正月□　日　石井　大智寺
蓮　　□」　『稲村カード』中西新太郎

稲村カードは、昭和六年に県史編纂主任であった稲村坦元氏の主唱で、初めて全県的な調査が実施された際に作成された「青石塔婆調査票」である。中西新太郎はこの板碑の調査者である。

9　至徳元年（一三八四）**銘名号板碑**（林家一〇二四九・一〇二五五）

上部を欠損しているが、蓮座上に「南無阿弥陀佛」、左右に「至徳元年」「九月廿六日」とある名号の板碑である。「昭和八・五・二七　比企郡高坂村大字毛塚　中村孝治氏宅」の註記がある。比企郡高坂村大字毛塚は現在の東松山市毛塚にあたる。『県報告』『東松山市史資料編第二巻』に未掲載。

10　康永二年（一三四三）**銘阿弥陀一尊種子板碑**（林家一〇二五六）

蓮座上に月輪をともなう阿弥陀種子・キリークを本尊とし、下部中央に花瓶と左右に「康永二年」「九月五日」の紀年銘を刻む。「出羽村大字大間埜上手組　小林源次郎」の註記がある。出羽村大字大間野は、現在の越谷市大間野一～五丁目に相当する地域である。『県報告』に未掲載。

11　乾元二年（一三〇三）**銘阿弥陀一尊図像板碑**（林家一〇二六四）

蓮座上に頭光を伴う来迎の阿弥陀如来像を線刻し、下部中央に「乾元二年閏四月日」、左右に花瓶を配している。「入間郡豊岡町大字扇町屋十三塚」の註記があるが、この板碑は、児玉町保木野の鈴木家にある図像板碑と同一である。この児玉の図像板碑は古くから知られており、陽刻の傘形後光を配し、阿弥陀の顔面のみ半肉彫とし身体部は線刻とする。鈴木家の敷地より出土したもので、児玉町の文化財に指定されている。註記は何らかの錯誤と考えられる。稲村坦元『青石塔婆』に写真掲載。中島利一郎「板碑年表」に「児玉、金屋、鈴木氏邸弥陀一尊画像　実見」とある。千々和実編『武蔵国板碑集録三』（八四頁）、『県報告』（55―34―1）等に図版を掲載。

12　弘安八年（一二八五）**銘阿弥陀三尊種子板碑**（林家一〇二六五）

蓮座を伴う阿弥陀三尊種子を本尊とし、下部に「弘安八年二月日」の紀年銘がある。「入間郡名細村上戸　常楽寺」の註記がある。入間郡名細村上戸は、現在の川越市上戸。常楽寺は時宗寺院で、一帯は国指定史跡の河越館跡である。

この板碑の阿弥陀種子の左右に判読しづらいが、「當山二世□阿□仏和尚」、「當山五世……」等の追刻がされている。常楽寺の住職の墓碑は、これに限らず板碑を転用している例が多い。常楽寺は、昭和二十六年十二月の火災で板碑も相当数が失われたり破損しているようなので、この板碑も罹災してしまった一枚と考えられる。中島利一郎「板碑年表」には、常楽寺の板碑十七基が安部立郎氏報（№8参照）として収録されている。同書に「弘安八年」とするものがあるが、この板碑かどうか不明である。

千々和実編『武蔵国板碑集録一』には該当する板碑はない。

13　応永十三年（一四〇六）**銘阿弥陀一尊種子板碑**（林家一〇二六六）

蓮座上に月輪を伴う阿弥陀種子・キリークを本尊とし、下部に「応永十三年十二月廿日」、左右に「妙善」「禅尼」とある。「入間郡名細村　常楽寺」の註記がある。

『川越市史』（三二四頁）の写真では、上部を中心に三片に割れた状態で掲載されている。『県報告』（19―98―26、「妙養禅尼」とするが誤り）。

※『川越市史』より転載

14　文安元年（一四四四）**銘阿弥陀三尊種子板碑**（林家一〇二六七）

蓮座上に月輪を伴う阿弥陀三尊種子を本尊とし、「文安元年甲子十一月廿一日」の紀年銘と左右に「□□」「大徳」及び光明真言を刻む。二条線の下に額部が施されている。「名細村」の印がある。『川越市史』に未掲載。

15　文明八年（一四七六）**銘阿弥陀三尊種子板碑**（林家一〇二六八）

蓮座上に月輪を伴う阿弥陀三尊種子を本尊とし、中央に「喜阿弥陀仏丙午」、左右に「文明八年十二月廿一日」の紀年銘と光明真言を刻む。「入間郡名細村大字上戸　常楽寺」の註記がある。

千々和実編『武蔵国板碑集録一』に記載されている。『川越市史』では、同書を引用した「上戸常楽寺亡失板碑」の一覧表に掲載されている。

16　文明十二年（一四八〇）**銘阿弥陀一尊種子板碑**（林家一〇二六九）

蓮座と月輪を伴う阿弥陀種子・キリークを本尊とし、「文明十二年庚子五月廿一日」の紀年銘と左右に「妙□」「禅尼」と刻む。「名細村大字上戸　常楽寺」の註記がある。

千々和実編『武蔵国板碑集録一』に記載されている。『川越市史』

では、同書を引用した「上戸常楽寺亡失板碑」の一覧表に掲載されている。

17　文安二年（一四四五）**銘阿弥陀三尊種子月待供養板碑**（林家一〇二七〇）

阿弥陀種子が欠損しているが、蓮座上に月輪を伴う阿弥陀三尊種子を本尊とする。中央に「月待供養　文安二年乙丑九月廿三日」の紀年銘と「逆修敬白」及び「昌満、妙圓、道智」など一五名の二字法名が刻まれている。初期の月待供養の板碑である。「名細村」の印が押されている。

千々和実編『武蔵国板碑集録一』にスケッチが描かれている。『川越市史』（三五一頁）では、二片に破損し、脇侍の種子と向かって右側が大きく欠損している拓本が掲載され、同書から欠損した法名等を補っている。『県報告』（19―98―13）。

18　文亀元年（一五〇一）**銘阿弥陀三尊種子板碑**　（林家一〇二七一）

蓮座上に月輪を伴う阿弥陀三尊種子（脇侍種子は月輪のみ）を本尊とし、「文亀元年辛酉六月十五日」の紀年銘と左右に「慶□」「禅尼」とある。上部に光明真言が天蓋のように刻まれている。「入間郡名細村大字上戸　常楽寺」の註記がある。千々和実編『武蔵国板碑収録一』には未掲載の板碑である。

19　延徳四年（一四九二）**銘阿弥陀三尊種子板碑**（林家一〇二七二）

蓮座上に月輪を伴う阿弥陀三尊種子（脇侍種子は月輪のみ）を本尊とし、中央に「妙性禅尼」、左右に「延徳四天」「十月十七日」の紀年銘。下部に花瓶を一対を刻む。

拓本の上部の余白に「入間郡飯能町能仁寺境也　昭和四年一月卅日拓」、「柴田常恵氏　稲村坦元氏　川口彝雄氏　同行」とある。昭和三年四月に埼玉郷土会が設立されたが、柴田常恵は顧問、稲村坦元は県史編纂主任、川口彝雄は県史編纂委員、林織善も常任委員として会の発展に尽くした。『埼玉史談』に多くの論文や史料紹介、見学記などを発表している。『県報告』『飯能の板碑』に未掲載の板碑である。

20　延慶三年（一三一〇）**銘阿弥陀一尊種子板碑**（林家一〇二七三）

蓮座を伴う釈迦種子・バクを本尊とし、左右に「延慶三年」「十二月日」とある。拓本下部の余白に「入間郡飯能町　智観寺境内　昭和四年壱月卅日拓　（キリク釈迦）」「柴田常恵氏　稲村坦元氏　川口彝雄氏　同行」とあり、19の板碑と同日に採拓したことがわかる。『県報告』（21―126―4）『飯能の板碑』（一〇四頁）に掲載されている。

21　宝篋印塔線刻板碑（林家一〇二七五）

バン種子を塔身部に彫った宝篋印塔を刻んだ板碑である。基礎の下線を省略しているのは、土中に差し込むので必要ないとみたためであろう。大徳子龍氏の収集品で、昭和五十二年に埼玉県立歴史資料館が大徳家より寄贈を受けた板碑群の一枚である。この板碑は古くから知られたもので、稲村坦元『青石塔婆』の解説では、多宝塔とし未完成の板碑としている。『坂戸市史』（一二六頁）『県報告』（26―94―13）

22　貞治六年（一三六七）**銘阿弥陀一尊種子板碑**（林家一〇二九三）

21とともに大徳子龍氏の収集品である。蓮座と月輪を伴う阿弥陀種

子を本尊とし、「貞治六年十月日」の紀年銘、左右に「正月廿四日慶圓」、「五月廿六日　慶一尼」とある。「入間郡大家村森戸　大徳氏蔵」の註記がある。死没年は不明であるが、正月廿四日に没した慶圓と五月廿六日に没した慶一尼の夫妻と推定される追善供養を貞治六年十月に執行したものと考えられる。柴田常恵「青石塔婆の紀年と法名」に引用されている。

『坂戸市史』（一一二六頁）、『県報告』（26―94―11）

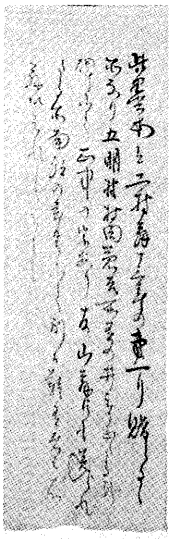
23　永正年間（一五〇四―一五二一）**銘阿弥陀一尊種子板碑**（杉浦家一四二）

阿弥陀三尊種子を本尊とし、中央に「道仙禅門」、左右に「永正□年」、「九月廿日」の紀年銘と光明真言を刻む。「昭和四十年四月十七日拓　久」の註記がある。

浦和第一女子高校郷土研究部『埼玉県北葛飾郡松伏町総合調査資料報告　松伏73』には、大川戸杉浦家所在の板碑として、この板碑が図示されている。嶋田富夫『郷土の板碑第2集　特集松伏町』に「浦和女子調査」として収録されている。『県報告』には未掲載。

24　正中二年（一三二五）**銘阿弥陀一尊種子板碑**（大柴家三〇）

蓮座上の阿弥陀種子を本尊とし、「正中二□」の紀年銘と一対の花瓶が刻まれている。拓本の下隅に以下の添え書きがある。



此墨本は二村翁十三年の第一月贈らるゝ
所なり五明村村田兼吉所有の井より出たる断
碑にて正中の字あり友山翁江も送られ
たる所南朝の年号にて別而難有者と右
翁いはれしよし

これによると、五明村村田兼吉の井戸から出土したことがわかる。五明村は、現在のときがわ町五明。この拓本を送られた大里郡胄山（熊谷市）の素封家で勤王の志士でもあった根岸友山（一八〇九～一八九〇）は、「南朝」の年号（「正中の変」を指すか）として有り難きものとしている。『県報告』（39―16―1）『玉川村史』に掲載。

25　文明十二年（一四八〇）**銘十三仏種子板碑**（大柴家二五）

枠線外に十三仏を配する板碑で、三具足・前机と「文明十二天庚子十一月廿三日」の紀年銘及び「二郎三郎　藤四郎　平蔵二郎」など二一名の俗名と「道性」とある法名からなる。日付から十三仏を本尊とする月待供養のための結衆板碑である。裏面に「此古碑明治十一年秋入間郡坂戸村公立学校敷地ヲ堀テ獲ル所ト云」の註記がある。

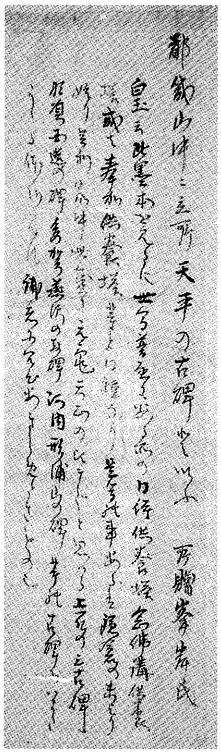
『坂戸市史』（一九八頁）の備考欄に「十三仏、元町電電公社工事現場より出土」とある。明治十一年（一八七八）に掘り出されたものが、やがて埋没し、電電公社の工事により再度、出土したものと考えられる。ただし、同書掲載の拓本では十三仏のうち釈迦（バク）、文殊（マン）、地蔵（カ）、薬師（バイ）が確認できるが、前机より上部は欠けた状態である。

※『坂戸市史』より転載

一方、この図（四二頁）では、三具足のほぼ全体と上部に三尊分の蓮座の一部が確認できる。双方を照らし合わせると、残された十三仏の配列や他の事例からみて、最上部に阿弥陀（キリーク）、向かって右に観音菩薩（サ）、左に勢至菩薩（サク）の三尊を主体とする十三仏であったことがわかり、全体が復元できる。

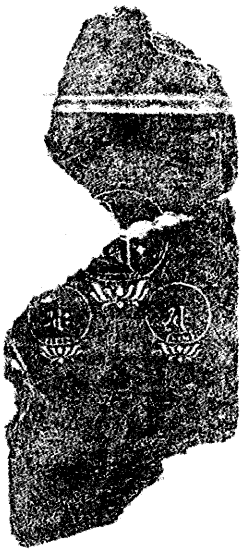
26　天正十五年（一五八七）銘阿弥陀三尊種子板碑（大柴家二三）

上部に天蓋を施し、蓮座と月輪を伴う阿弥陀三尊種子を本尊とし、三具足、前机の下に「天正十五年丁亥十月吉日」の紀年銘がある。左右に法名が確認できるが「妙蔵尼　徳蔵尼」などが辛うじてわかる程度である。摩滅により、その殆どが判読できないが、〇〇尼とする場合が多く女性の交名による念仏結衆の板碑と推定できる。拓本の上部に左記の貼紙がある。



都幾山中ニ立所　天平の古碑といふ　所贈峯岸氏
白玉云、此墨本を見るに世間普通にある所の日待供養塔念仏講供養塔或者奉加供養塔等と同種なり、是等の事あるは鎌倉の末より始り足利家中世盛に元亀天正の頃までと思ハる、上州の三古碑那須国造の碑多賀燕沢の両碑河内形浦山の碑等の古碑者いまたかゝる体を見ず識者に問ひあきらめたきもの也

これによると、拓本を峰岸氏から贈られた人物が、「天平の古碑」とすることに疑問をもち、識者に問い合わせるとの見解が示されている。冒頭の「都幾山中」は、ときがわ町西平の古刹である慈光寺のことである。この板碑は同寺に現存しているが、左図のように二片に割

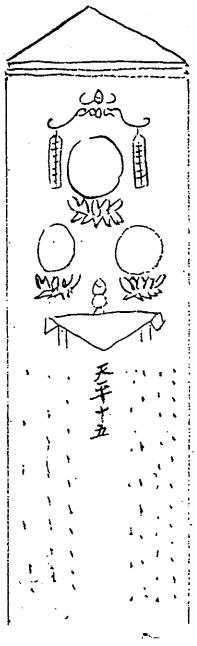


※『都幾川村史資料6』より転載

れた上、下半部と左部分が欠損している状態である。旧都幾川村で最末期の板碑として紹介されている。

ところで、この板碑については、野口達郎氏が『都幾川村史資料6 中世石造物』の解説「都幾川村の板碑」のなかで、都幾川村所在の板碑について、先人たちの記録や調査を跡づける詳細な報告が掲載されている。これによると、『武蔵国郡村誌』の記述に本板碑がはじめて登場しているのがわかる。

『郡村誌』によると、「左衛門尉平行直」とある弘長二年銘阿弥陀一尊種子板碑の由来のあと、「……村民峰岸重行なる者発見して掘出し再建す、其他天平十五年、弘安七年、徳治二年、元亨四年、嘉暦二年、文和四年、寛正五年等の石碑路傍にあり。」（傍線筆者）とし、この板碑について初めて触れている。峰岸重行は、平村の前副戸長をつとめた人物で、明治十四年（一八八一）に番匠村の小室元長とともに『慈光寺実録後編』を著し、このなかに「天平十五年銘の板碑」が完形品として図示されている。



この拓本は一部に破損があるが、現存する板碑は大きく原形を損ねているので、全容がわかる資料として貴重である。

千々和実編『武蔵国板碑集録二―旧比企郡―』（都幾川村№13）の備考では山門址上段とある。都幾川村考古学研究会『都幾川村板碑集録』（八九頁）、『県報告』（38―64―29）、都幾川村『都幾川村史資料6 中世石造物』（一一七頁）

おわりに

以上、二十六点の板碑拓本資料について紹介した。掲載の板碑については、既刊の報告書や論文等で来歴等を出来る限り調べたが、見落としている文献も多くあることをお断りしたい。

林家の拓本は川越市立図書館や常楽寺など、いわば地元の板碑が多く、やや拓本の巧拙もみられるが、なによりも余白に採拓した場所やときには年月日、同行者が記されており、個々の板碑を同定したり検討する場合の手がかりになる。また、大柴家の拓本は、貼紙がされており、当時の板碑に関する知識や扱い方がわかる資料である。既に掲載した半数近くが失われたり、破損したりしているが、拓本として残されていることで、今後の板碑研究を進めていく上での貴重な資料となるものである。

引用・参考文献

山中笑「武蔵野の板碑に就いて」（『武蔵野』第二巻第一号）一九一九

中島利一郎「板碑」（『考古学講座第三十三巻』）一九三〇

稲村坦元『青石塔婆』（日本考古図録大成第拾三輯）一九三一

服部清五郎「頓写経板碑に就いて」（『考古学雑誌』第一九巻第七号）一九二九

服部清道『板碑概説』一九三三　鳳鳴書院

千々和実編『武蔵国板碑集録一』一九五六　（私家版）このなかに川越市立図書館、常楽寺の板碑が集録されている。とくに常楽寺は、昭和二十六年に本堂の火災で多くの板碑が罹災したが、九月五日に二十三基を調査し記録されている。

千々和実編『武蔵国板碑集録二―旧比企郡―』小宮山書店　一九六八

千々和実編『武蔵国板碑集録三』一九七二　雄山閣

浦和第一女子高校郷土研究部『埼玉県北葛飾郡松伏町総合調査資料報告　松伏73』一九七三

嶋田富夫『郷土の板碑第2集　特集松伏町』（私家版）一九七八

都幾川村考古学研究会『都幾川村板碑集録』一九七七

坂戸市教育委員会『坂戸人物誌第1集』一九八〇

坂戸市『坂戸市史　中世史料編Ⅱ』一九八〇

埼玉県教育委員会『埼玉県板石塔婆調査報告書』一九八一

飯能市教育委員会『飯能の板碑』一九八二

東松山市『東松山市史資料編第二巻古代～中世　文書・記録・板石塔婆編』一九八二

川越市教育委員会『川越の人物誌第1集』一九八三

川越市『川越市史第二巻　中世編　別巻板碑』一九八五

児玉町教育委員会『児玉町の文化財』一九八八

玉川村『玉川村史　通史編』一九九一

都幾川村『都幾川村史資料6文化財編　中世石造物』一九九五

縣敏夫『服部清道と『板碑概説』ある板碑研究者の歩み』揺籃社一九九八

都幾川村『都幾川村史　通史編』二〇〇一

川越市立博物館『中世びとの祈りⅡ―板碑のある風景―』二〇〇四

※

埼玉県立文書館『明星院・奥貫家・井上家文書目録』収蔵文書目録第28集一九八九

埼玉県立文書館『小室家文書目録』収蔵文書目録第36集　一九九七

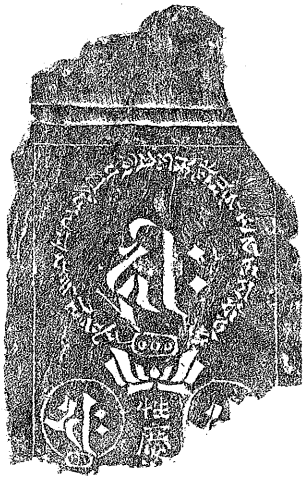
埼玉県立文書館『小林（茂）家文書目録』収蔵文書目録第37集　一九九八

埼玉県立文書館『林家文書目録』収蔵文書目録第22集　一九八六

埼玉県立文書館『諸家文書目録Ⅲ（杉浦家文書を収録）』収蔵文書目録第21集一九八五

1　阿弥陀三尊種子板碑片　高三四・〇　幅二一・〇

（林家一〇二一二）



キリーク
（月輪）
（蓮座）
サ
（月輪）
サク
（月輪）
（蓮座）
性慶［

2　板碑片　高二四・五　幅一五・五

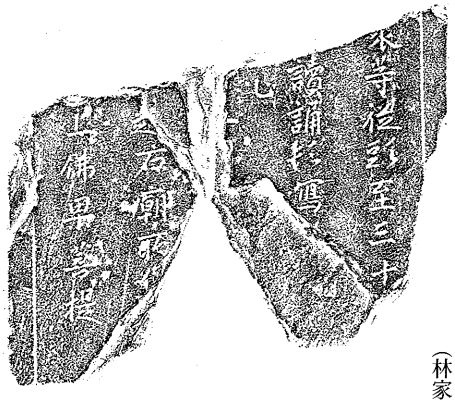
（林家一〇二一二）

］功徳普及於一切

3　板碑片　高二四・〇　幅一五・〇

4　板碑片　高二六・〇　幅一七・五

（林家一〇二一二・一〇二五八）



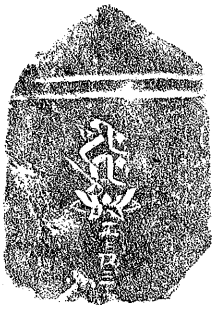
（衆カ）
□等従頭至三十［
読誦頓写［
乙（十カ）
］□［

（林家一〇二五八）

起石廟所［
］上佛果菩提

5　正長三年（一四三〇）銘阿弥陀一尊種子板碑片

高二二・五　幅一五・五　（林家一〇二一四）



キリーク
（蓮座）
正長三［（年）

6 結衆板碑片 高四〇・〇 幅二四・五 （林家一〇二二・一〇二四）

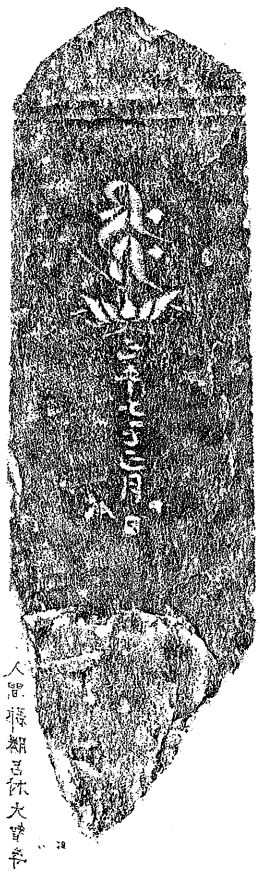
印
法印承鎮 慶訓 妙昌尼 妙浄尼 道本門 道□門 □二郎 道海□
智元 暁順 性幸尼 妙秀尼 □□門 慶□尼 □五郎
行□ 妙珎尼 妙性尼 道□門 妙圓尼 □□郎 祐□
（阿叡□ □秀尼 妙秀尼 常□門 道□門 □□郎 祐□□
座）阿覚秀 妙□尼 妙芳尼 栄金門 妙□尼 □□郎 性□尼
阿仙海 □智尼 徳□尼 常慶門 □□門 □□郎 了心門
蓮 □賢□ 妙鎮尼 妙□尼 慶秀尼 □三郎 性□門 尊栄
□栄□ 妙□尼 性□門 □心尼 二郎□□
□□□ 妙仙尼 性□門 妙□尼 □□郎
□□ 妙□尼 道善門 妙仙尼 □五郎
□浄 妙□尼 □□門 道栄門 六郎四郎

7 正安四年（一三〇二）銘阿弥陀一尊種子板碑 高六四・〇 幅二一・五 （林家一〇二四九）

（天蓋）
キリーク
（月輪）
（蓮座）

（花瓶）
正安四年八月日
（花瓶）

8　正平七年（一三五二）銘阿弥陀一尊種子板碑　高六〇・五　幅一八・〇　（林一〇二五〇）

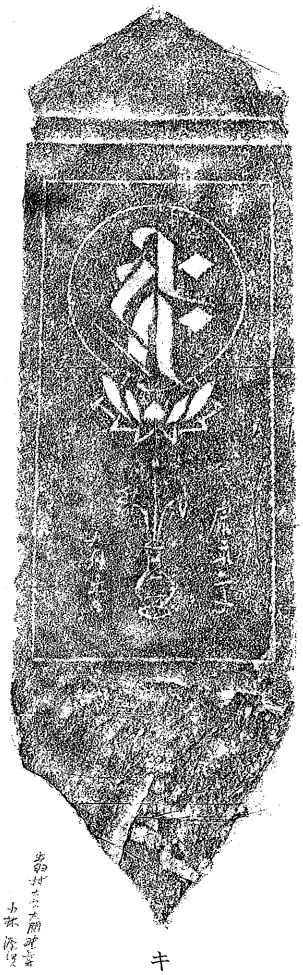


キリーク
（蓮　座）
正平七年正月十八日

9　至徳元年（一三八四）銘名号板碑　高六九・〇　幅二六・五　（林家一〇二四九・一〇二五五）

至徳元年
無阿弥陀佛
（蓮　座）
九月廿六日

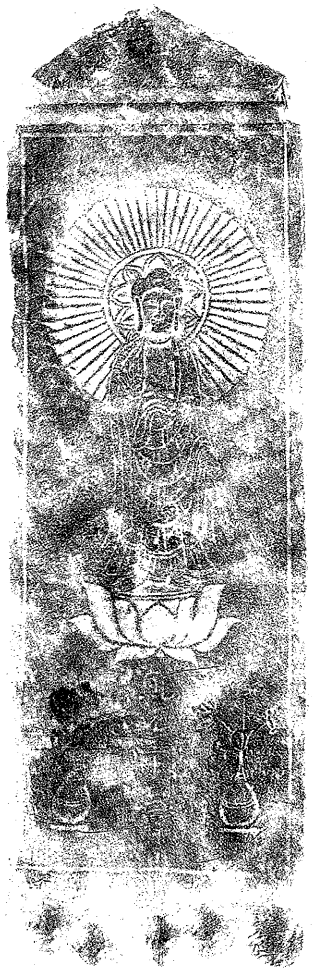
10　康永二年（一三四三）銘阿弥陀一尊種子板碑　高六九・五　幅二一・〇　（林家一〇二五六）



キリーク
（輪　座）
（月　蓮）

康永二年
（花瓶）
（五カ）
九月五日

11　乾元二年（一三〇三）銘阿弥陀一尊図像板碑　高一〇二・〇　幅三一・〇　（林家一〇二六四）

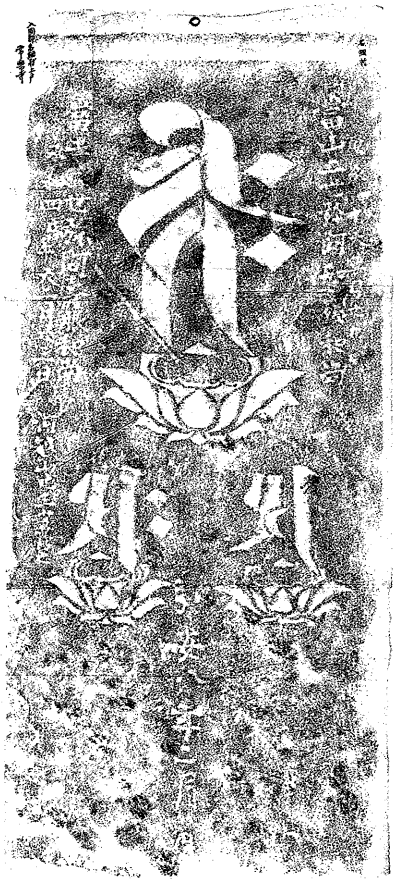


［阿弥陀如来図像］
（蓮　座）

（花瓶）
乾元二年閏四月日
（花瓶）

12

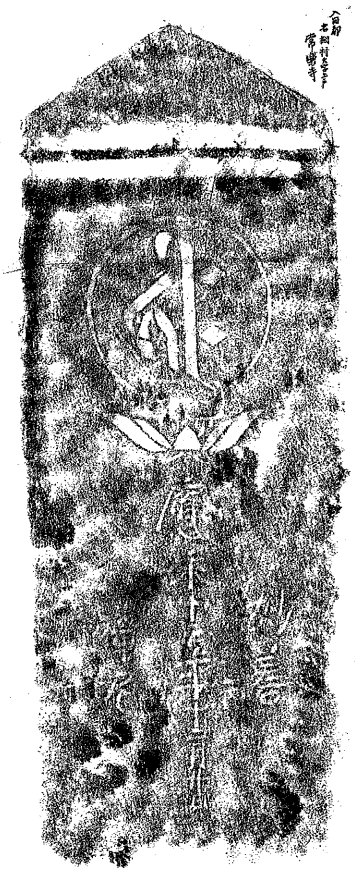
弘安八年（一二八五）**銘阿弥陀三尊種子板碑**　高七五・〇　幅三一・〇　（林家一〇二六五）



キリーク
（蓮　座）
サ
（蓮　座）
サク
（蓮　座）
弘安八年二月　日

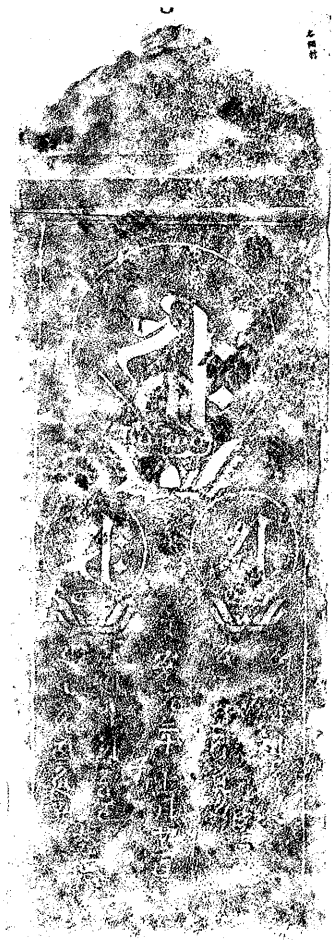
13

応永十三年（一四〇六）**銘阿弥陀一尊種子板碑**　高六〇・〇　幅二三・〇　（林家一〇二六六）



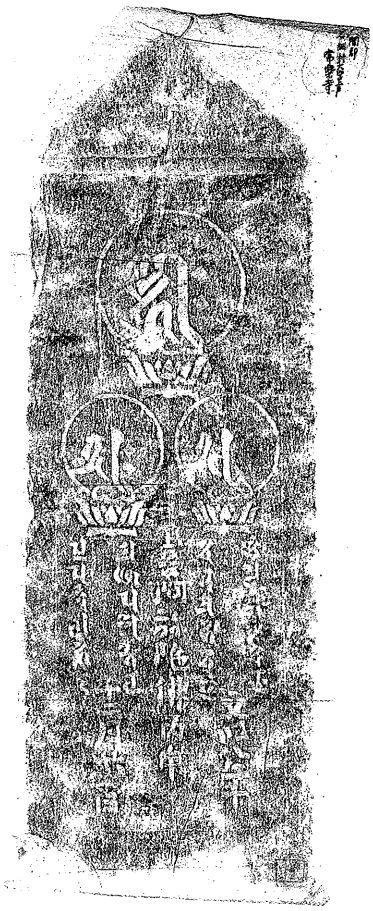
キリーク
（月輪）
（蓮　座）
応永十三年十二月廿日
禅　尼　妙　善

14　文安元年（一四四四）銘阿弥陀三尊種子板碑　高七四・五　幅二六・〇　（林家一〇二六七）



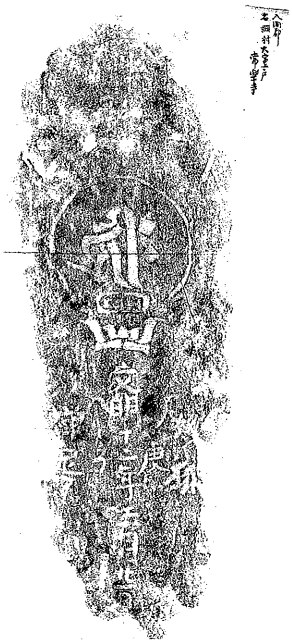
キリーク
（輪座）サ
（月蓮）
（光明真言）
□□
文安元年甲子十一月廿一日
（輪座）サク
（月蓮）
（光明真言）
大徳

15　文明八年（一四七六）銘阿弥陀三尊種子板碑　高六二・〇　幅二一・五　（林家一〇二六八）



キリーク
（輪座）サ
（月蓮）
（光明真言）
文明八年
喜阿弥陀仏　丙午
十二月廿一日
（輪座）サク
（月蓮）
（光明真言）

16 文明十二年（一四八〇）銘阿弥陀一尊種子板碑　高四五・〇　幅一六・〇　（林家一〇二六九）



キリーク

（輪　月）
（座　蓮）

文明十二年五月廿一日

妙庚□子
禅尼

17 文安二年（一四四五）銘阿弥陀三尊種子月待供養板碑　高五四・〇　幅二七・〇　（林家一〇二七〇）

（蓮　座）

サ

サク

（輪　月）
（座　蓮）

（輪　月）
（座　蓮）

昌満　妙圓　道智
昌義　道法　浄智
妙歓　道善

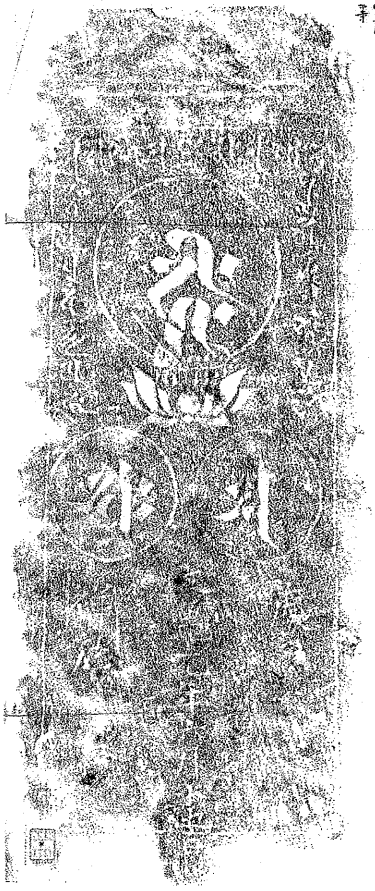
逆

月待供養　文安二年　乙丑　九月廿三日

妙喜　道義　修
妙音　道秀
道祐　道賢　妙善

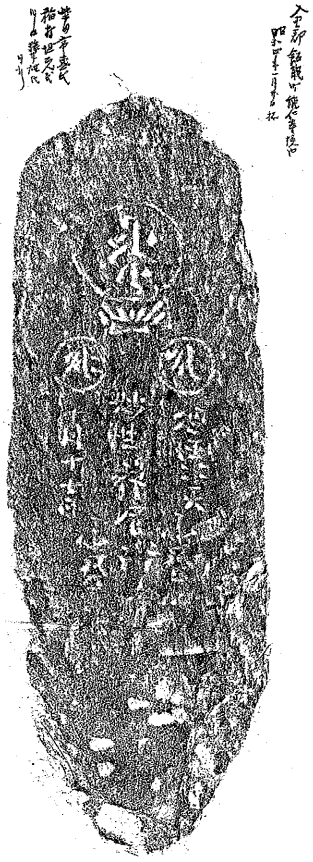
敬白

18 文亀元年（一五〇一）銘阿弥陀三尊種子板碑　高六一・〇　幅二三・五　（林一〇二七一）



（光明真言）
サ　輪
（月　慶　□
キリーク　輪
（月　座
（蓮
文亀元年六月十五日　辛酉
（光明真言）
サク　輪
（月　禅　尼

19 延徳四年（一四九二）銘阿弥陀三尊種子板碑　高五四・五　幅一九・〇　（林家一〇二七二）



サ　輪
（月　延徳二　天
（花瓶）
キリーク　輪
（月　座
（蓮
妙　性　禅　尼
（花瓶）
サク　輪
（月　十月十七日

20　延慶三年（一三一〇）銘阿弥陀一尊種子板碑　高六〇・〇　幅一九・〇　（林一〇二七三）

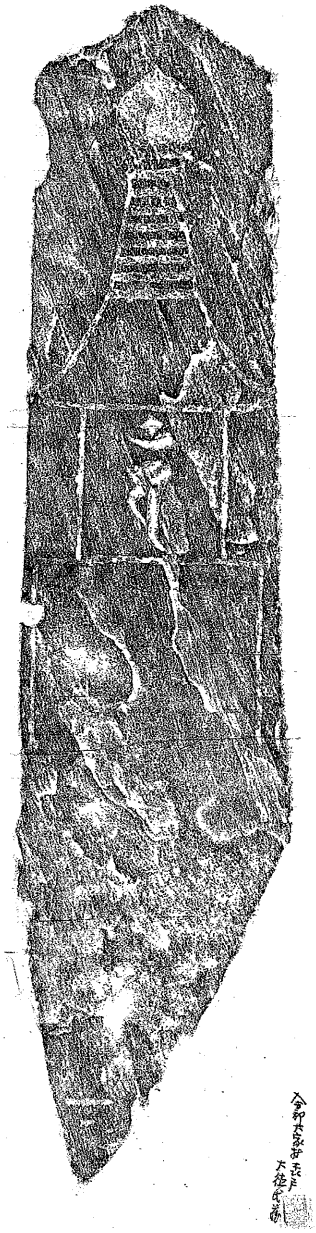
バク

（蓮　座）

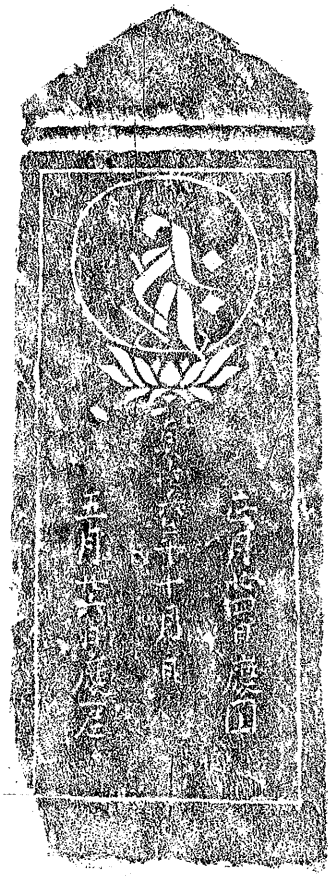
延慶三年

十二月日

21　宝篋印塔線刻板碑　高八八・〇　幅二〇・〇　（林一〇二七五）



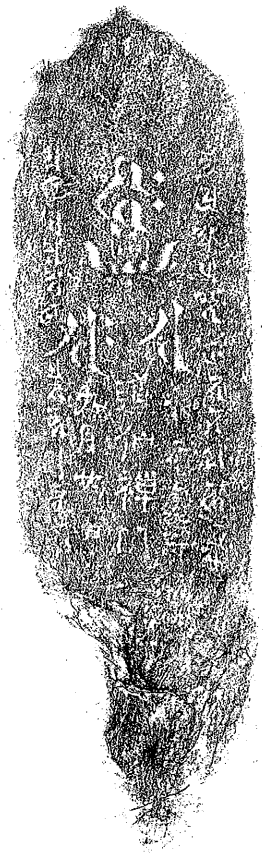
22 貞治六年（一三六七）銘阿弥陀一尊種子板碑　高六二・〇　幅二三・〇　（林家一〇二九三）



キリーク
（輪座）
（月蓮座）

正月廿四日　慶圓
貞治六年十月　日
五月廿六日　慶一尼

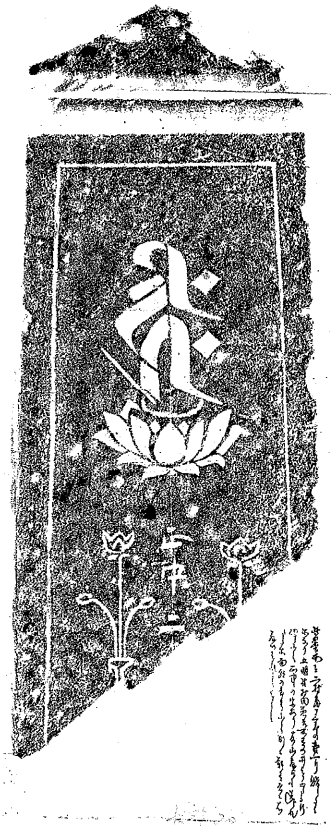
23 永正年間（一五〇四～一五二一）銘阿弥陀一尊種子板碑　高五六・〇　幅一六・五　（杉浦家一四二）



（光明真言）
キリーク
（サ）座
（蓮）
（サク）
（光明真言）

永正□年
道仙禅門
九月廿日

24　正中二年（一三二五）銘阿弥陀一尊種子板碑　高五八・〇　幅二三・五　（大柴家三〇）



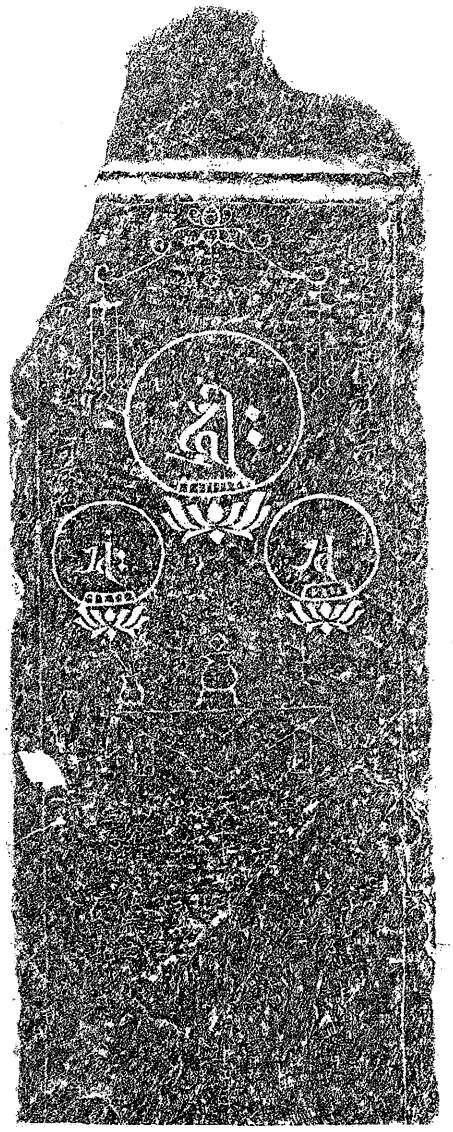
（花瓶）
正中二
（花瓶）
キリーク
（蓮　座）

25　文明十二年（一四八〇）銘十三仏種子板碑　高五九・〇　幅二三・〇　（大柴家二五）

（蓮座）

二郎三郎　太祐二郎　まこ二郎　□□□　□□□
近□五郎　五郎三郎　道　性
（足机）　藤四郎　平次三郎　庚　白
（具）　太□　ひこ太郎　文明十二天十一月廿三日
（三前）　二郎太郎　源藤二郎　子　敬
平蔵二郎　ひこ太郎　八郎二郎
七郎四郎　又二郎　くすこ　□□□　□□□

26 天正十五年（一五八七）銘阿弥陀三尊種子板碑　高一三七・〇　幅五二・〇　（大柴家二三）



□□十方□仏［　］

（天蓋）

キリーク

（月輪）
（蓮座）

サ

（月輪）
（蓮座）

サク

（月輪）
（蓮座）

（三具足）
（前机）

□法尼
□□尼

天正十五年　丁亥　十月吉日

「　」
□□尼

妙蔵尼

徳蔵尼
慶□尼
秀□□

］是阿弥陀